

研究授業は  
「型」より「ねらい」

授業は互いに見せ合うことで上達するもの。だから研究授業が必要。

指導案を準備し、参観し、協議会で意見し合う「型」が定番です。でも、定番であっても万能ではない「型」に縛られると、「研究授業は大変」「協議会は気が重い」と感じやすくなります。

何のために研究授業をするのかという「ねらい」を明確にすれば、「型」に縛られない工夫ができます。研究授業をもっと気軽に実施できるよう「ねらい」を整理しましょう。気軽でない授業は「よそ行き」になり、「普段着」として日常の授業の改善には繋がりません。

動画で  
視聴できます



**ねらい  
① 査定** 教育実習生を評価する

基本的な授業技術を確認・評価します。協議会では改善点を指摘し、努力を認めて今後へつなげます。評価用紙があると手早くできます。また、指導案の書き方や協議会における自評・質疑・応答・意見・指導助言や講評といった定番の「型」を学ぶこともねらいです。

**ねらい  
② 研鑽** 授業の改善点を発見する

複数人で1人を磨きます。複数人で授業を参観し、協議会で批評を述べ合います。授業者より参観者の力量が高くないと批評の内容が乏しくなるため、授業者よりも参観者の力量こそが問われます。指導案等の作成を通して授業計画を練るのも研鑽であり、授業計画も批評の対象になります。ただし、「よそ行き」の授業を批評しても日々の授業に活かせないので、授業内容や教材準備は気張らずに普段通りで授業を行いましょう。

**ねらい  
③ 示範** 好例を観て学びとる

経験豊富な1人の教師の授業を観て、経験の浅い教師が学びます。複数人が同時に学ぶことができ効率的です。示範がねらいなら、参観者による批評は不要。協議会は質疑や、気付きの発表で参観者側の学びを確認する場にします。協議会を設定せず、記者会見のような短時間の質問会や、感想をする記述だけでも代替できます。力量差のある2名でTTや2クラス合同授業を多く組めば、示範は日常的に実施可能になり、若手の育成につながります。

**ねらい  
④ 提案** 研究の工夫や可能性を見せる

「この工夫、どうですか？」と授業者が提案します。学校研など共通テーマで研究する際に適します。協議会では授業者の力量ではなく、提案された工夫について、適否や改善策を話し合います。グループワークで視野や発想を広げ、協議し、全員で目ざす方向や共通の取り組みへと収束させ、各自の授業に取り入れます。

形式的な指導案を配るより、提案する工夫の意図に焦点化した簡潔な資料配付の方が適します。研究テーマに対する共通認識を築くため、研究授業の出来よりも協議会での闇達な意見交換の方が重要です。新しい授業の在り方を探るにはフラットな関係でのアイデア創発が望ましく、若手もベテランも皆が遠慮なく意見を表明できるように工夫しましょう。

**ねらい  
⑤ 検証** 研究の工夫の効果を確かめる

「研究の工夫をした結果は？」と手だての有効性を検証する研究授業です。授業や協議よりも授業の計画段階こそが重要です。学校研究では1人の授業計画を皆で創り上げ「この工夫をすれば、こうなるはず」という仮説を立てて授業に臨みます。計画を一緒に練るため、研究への参画意識も高まります。

授業後は結果を分析し考察します。協議会は行わず、分析結果レポート作成で代替できます。

研究部で計画した「検証」授業を他の参観者へ「提案」するなど、1つの授業に「検証」と「提案」のねらいをもたせることも可能。また、個人研究では研究授業のねらいは常に「検証」とし、自分で結果の分析と考察を行います。

「ねらい」に応じ、やり方を工夫して、不要な負担を省きましょう。

「提案」をねらう研究授業の協議会で授業技術を批評し合うなど、「ねらい」とやり方がちぐはぐだと意味がありません。何のための研究授業なのかを全員で確認し、ねらいの達成に不要な準備や時間は省き、焦点化します。また、協議会の意図とやり方が授業前に示されると参観しやすくなります。



- 研究授業の前に皆でねらいを確認している
- 協議会のやり方や配付資料はねらいに応じて変えている
- 研究授業が気軽に行えるようやり方を工夫し、負担を減らしている
- 協議会のやり方を研究授業の前に示している